古代メソポタミアの学校の教授方法に関する研究
－古バビロニア期のニップルを中心として－

中　野　和　光

美作大学・美作大学短期大学部紀要（通巻第68号抜刷）

美作大学・美作大学短期大学部紀要
2023, Vol. 68. 37～43

論　文

古代メソポタミアの学校の教授方法に関する研究
－ 古バビロニア期のニップルを中心として －

Teaching Methods in the Ancient Mesopotamian Edubba: Nippur in the Old Babylonian Dynasty

中　野　和　光

要　約

本研究は、古代メソポタミアの古バビロニア王朝期（BC1894－1595年頃）の学校（エドゥバ）のカリキュラムと教授法を、1995年ごろから劇的に進歩したといわれるニップル市の学校の研究を中心にして明らかにした。ホスキン（Keith Hoskin）は、「教育の歴史は書くことの歴史である」という論文を書いているが、無文字社会においても、教育はあり、エドゥバの意義は、文字社会における教育が構造化されたカリキュラムを必要とすることを示していることにあることを論述した。

キーワード：楔形文字、エドゥバ、無文字社会の教育、文字社会の教育

はじめに

本稿は、古代メソポタミアの学校においてどのような内容がどのような教授方法で教えられていたかを明らかにすることを目的とする。

研究の動機の一つは、「教育の歴史は書くことの歴史である」[1] というホスキン（Keith Hoskin）の論文を読んで、学校教育は、書くことと関連しているが、教育は、文字の発明以前の話し言葉だけの社会においてもあったのではないか、と考えたことである。

研究のもう一つの動機は、言語学者ハリデー（M. A. K. Halliday）が、子どもは、小学校入学前までは、家族や友達との話し言葉が中心であるが、小学校に入学してからは、書き言葉を学習する。この書き言葉の学習は、人類の歴史において、絵が記録のための言葉として使われるようになり、文字を書く時代に到達したことに類比される[2]、と述べていることから、文字の発明以前の話し言葉だけの社会における教育と文字が使用される社会の教育との関係の中で学校教育を検討する必要を感じたことである。

古代メソポタミアの学校に関する研究は、クレーマー（Samuel. N. Kramer, 1897－1990）の研究が最もよく知られている。ロブソン（Eleanor Robson）によれば、1995年頃から、古バビロニア期のニップル市の学校の研究が粘土板に書かれた楔形文字の解読にもとづいて、劇的に進んだ[3]。古代メソポタミア文明の歴史書の中で、学校について書かれたものもかなりある。日本語の文献では、小林登志子『シュメル―人類最古の文明』[4] が、主としてクレーマーに基づいて説明している。桑原俊一は、「古代社会の教育：古代メソポタミアの教育」[5] の中で、古代メソポタミアの学校の内容を説明し、学校に関する対話を紹介している。

本稿では、クレーマーの研究と1995年頃から進んだ古バビロニア期のニップル市の学校の教育に関する研究を中心にして、学校におけるカリキュラムと教授法、規律について検討し、その上で、話し言葉だけの社会との対比において、文字のある社会における学校教育の意味について検討する。

楔形文字の発明と古代メソポタミアの学校

楔形文字は、紀元前4000年期末、シュメール人によって、交易の記録の必要から生まれたといわれている。ベッセラ（Denise Schmandt-Bessera）によれば、交易の記録は最初は、トークンによって行われ、絵文字を経て、粘土板に尖筆で書く楔形文字に発展した[6]。

クレーマーによれば、紀元前3000年には、教授と学習を考えている書記がいた。紀元前三千年期半ばには、シュメールには多くの学校があった。シュメールの学校制度が栄えたのは、紀元前2500～2000年頃である[7]。この時期に発掘された粘土板は、大多数が行政的なもので、学校組織、実践に関するものはなかった。紀元前二千年期前半の学校については、実践に関する粘土板が多数発見されている。シュメールの学校は、「エドゥバ（edubba）（粘土板の家）」と呼ばれた。学校の目的は、経済的行政的必要を充たす神殿や宮廷の書記を訓練することであった。学校の卒業生は、神殿や宮廷の書記になった。生徒の大多数は、豊かな家庭の子どもであった。生徒は全員男子だった。教師（「学校の父」）、助教師（「大きな兄弟」）、規律専門の教師、がいた。カリキュラムは、楔形の文字の書き方、語彙（植物、動物、地理、鉱物）、数、数学的問題、文学的（literary）（神話、叙事詩、賛歌、哀歌、英知）テクストの模写からなっていた。最初は、簡単な綴りから始め、次に、何百、何千という単語、語句の習熟、短い文章、ことわざ、寓話、契約書、数学、実際的問題（賃金、運河の掘り方、建設工事）へと進んだ。教授法は今のところ、よくわかっていないが、学校の一日は、「学校の日々」等のエッセイで、分かっている。生徒は日の出から日没まで学校にいた。規律は厳格であった。学校の建物は、マリ市で、二人掛けか四人掛けのレンガの長椅子のある教室の形をしたものが見つかったが、ニップル市、シッパル市、ウル市では、普通の家の中に粘土板が多数見つかった[8]。

シュメール語が話し言葉として使われたのは、ウル第三王朝期（紀元前2113頃－2004年頃）までである。それ以後は、話し言葉としては使われなくなり、書き言葉としてのシュメール語が学校で教えられ、書き言葉としてのシュメール語は、紀元前331年にマケドニアのアレクサンドロス大王がアケメネス朝ペルシャを滅ぼすまで使われた。それ以後も、シュメール語学者によって使われていたが、紀元1世紀には姿を消した[9]。

古バビロニア王朝期の学校のカリキュラムと教授法

前二千年期に入ると、シュメール語は話し言葉としては終わった。シュメール語は、書記的、儀式的な目的のために使わるようになった。前二千年期と前千年期には、メソポタミアの書く文化は、語彙リストとバイリンガリズム（シュメール語とアッカド語等）によって特徴づけられる[10]。

古バビロニア王朝期（紀元前1894－1595年頃）の学校の研究は、ティニー（Steve Tinney）によれば、1888－1892年にペンシルバニア大学によって発掘された約60,000の粘土板と、第二次世界大戦後に発掘された1400以上の粘土板に基づいている。両方合わせて、古バビロニア期のシュメールの文書の83%は、ニップル市で発見されたものであった[11]。

古バビロニア期の学校のカリキュラムと教授法を、ニップル市を中心に、学校に関連する粘土板と発掘された場所、建物、周囲の状況、等から考察したヴェルドフイス（N. Veldhuis）、ロブソン（E. Robson）、デルネロ（P. Delnero）、ティニー（S. Tinney）、グリフィス（Mark Griffith）、スジョバーグ（A. W. Sjoeberg）らの研究に基づいて検討してみたい。

（1）学校の建物、場所

大量の学校に関連する粘土板が、ニップル市の居住区の小さな「住居F」で発見されたことから、ヴェルドフイスは、官僚制は、概ね書くことに依存しており、現在のような公私の区別のない古代の官僚制においては、家族関係と引き立てが重要であることから、書くことの学習という公的な仕事が、個人の家で行われた背景ではないかと推測している[12]。

学校が、個人の家で行われたとする見解は支持者が多い。例えば、グリフィス（Mark Griffith）は、次

のように述べている。

教授は、通常、個人の家の一室で、教師と生徒の1対1で行われた。自分の子どもの場合もあった。何代も書記職を永続化した家もあった[13]。

書記教育が個人の家で行われていたというこれらの見解に反対の見解もある。

スジョバーグ（A. W. Sjoeberg）は、次のように述べている。

ウルク市、ラルサ市では、粘土板は宮殿で見つかった。マリ市では、宮殿の中に教室と信じられる二つの教室が見つかった。ニップル市とキッシュ市では、居住区で見つかった。ニップル市では、少なくとも4つの家で見つかったが、それらのうちの3つは相互に隣接していた。学校だとすると、3つの学校が隣接していたことになる[14]。

（2）カリキュラム

ヴェルドフイスによれば、ニップル市の学校のカリキュラムは、第一局面と第二局面があった[15]。

第一局面（初級レベル）

1）書く技術

楔形の記号の形の練習、綴り、綴りの意味、個人の名前のリスト

2）語彙のリスト

木、木材製品、葦、舟、皮、皮革製品、陶器、金属、動物、石、植物、魚、鳥、地理的な名前、術語、星、食材

3）上級リスト（あらゆる可能な読み方を持った記号、複合記号のリスト）

4）数（度量衡のリストと表、掛け算と逆数の表、等）に関する練習

5）契約見本、ことわざ

第二局面（上級レベル）

シュメール語の文学的テクスト―神話、叙事詩、神や王、神殿への賛歌、知恵（鳥と魚、冬と夏、鍬と鋤、人間と人間の間といった論争のテクスト、ことわざ、息子への教え、等）

グリフィスによれば、語彙や文学的テクストの学習の後、生徒の中には、栽培学、貿易、法律、手紙の書き方を含んだ行政文書の準備の学習に進む者もいた[16]。

ヴェルドフイスのリストには書かれていないが、音楽も教えられている。

スジョバーグによれば、エドゥバにおける試験文の中に、歌の名前、歌の各部分、（代わるがわる唄う）合唱詩歌、独唱会、終楽章（フィナーレ）、声を震わせること、に関するものがあった[17]。

「失敗した試験」という教師が問い、生徒が答えるという卒業試験の問いの文章を見ると、カリキュラムの内容が想像できる。

1）楔形の方向は6つあるが、その名前を知っていますか。

2）シュメール語の秘密の意味は？

3）シュメール語からアッカド語への翻訳とその逆。

4）3つのシュメール語に対するアッカド語の同義語は？

5）シュメール語の文法の術語。

6）シュメール語の動詞の語形変化。

7）さまざまなタイプの書法と技術的作文。

8）シュメール語を表音的に書く。

9）全ての階級の神官の専門用語、銀細工師、宝石職人、牧夫、書記のような専門職の専門用語を理解しているか？

10）書き方、封筒の作り方、文書への印の押し方。

11）あらゆる種類の歌、合唱のしかた。

12）数学、畑の分割、配給の分配

13）さまざまな楽器[18]。

古バビロニア王朝期の学校のカリキュラムは、書記の仕事に必要な文字の書き方、読み方、語彙、数、契約見本、ことわざ、という初級課程を経て、神話、叙事詩、賛歌、知恵という書記の仕事に必要な知識・技能、都市神・王を頂点とする階級社会の秩序を教えて書記としてのアイデンティティを育成している。

（3）教授法

グリフィスによれば、教授法は、教師の手本を見て、書き、教師がそれを直すという徒弟制度の方法であった[19]。

粘土板のタイプに基づいた具体的な教授法をヴェルドフイスは、次のように説明している。

粘土板には、4つのタイプがあった。

タイプⅠ　4または6の面を持った角柱と大きな粘土板。角柱は、各面に2～4の欄があり、600行以上かける大きなものもあった。章へ分割して書く場合には助けになった。比較的上級の生徒が書いたものであると思われる。もう一つのタイプは、大きな粘土板で、表面と裏面があり、4～6の欄がある。奥付に書記の徒弟と書かれたものもある。

タイプⅡ　表面と裏面のある中間の大きさの粘土板。表面の左側に教師が6～30行の短い抜粋を書き、右側には1～3の欄があり、生徒がその抜粋を模写している。欄が1～3あるのは、生徒が複数の模写をするのを許容するためである。書き終えると生徒は、それを消して、次の練習に備える。練習は数回繰り返される。

裏面は、3～5の欄があり、生徒は、以前習った主題の長い抜粋を60～150行で書く。

タイプⅡはよく使われている。

タイプⅢ　表面も裏面も一つの欄しかなく、10～15行でテクストの抜粋が書かれている。表面から裏面に続けて一つの練習が行われている。タイプⅢの抜粋は、タイプⅡの表面の抜粋とほぼ同じ長さである。タイプⅡの教師の手本がしばしばそのまま切り取られて、生徒の模写のために再利用されている。タイプⅢはこの再利用のためであると思われる。

タイプⅣ　円形の粘土板。教師の手本―語彙リスト、数学的テクスト、ことわざ、賛歌が書かれている。タイプⅣは、教師の手本からなっている。消したり、再利用の痕跡がないことから、おそらく、家に持ち帰り、両親に進歩を示すための書く手本であった[20]。

この記述に見られるように、粘土板に書かれた教師の手本を模写することが、学習の基本的方法であり、知識獲得の方法であった。教師は手本となるテクストを書き、生徒の書いたものを見て、それを直した。

（4）規律

規律は厳しかった。サトウキビの茎を持った規律専門の教師がいた。

許可なく話すと鞭うたれた。
許可なく立つと鞭うたれた。
字が下手だと言って鞭打たれた。
シュメール語を話さないといって鞭打たれた。
だらしない服といって鞭打たれた。
教室を出て校門の方へ行ったといって鞭打たれた[21]。

（5）書記の仕事

エドゥバの教育の目的は、官僚的行政組織の中で働く書記の訓練であった。

卒業生は、宮廷か神殿の書記として働いた。

バウアー（Josef Bauer）らは、紀元前四千年期末のウルク期末期、初期王朝期（紀元前2900年～2335年頃）の行政部署を次のように説明している。

①漁業
②家畜と家畜に由来する製品
　羊と山羊、織物、畜牛（牝牛、牡牛、去勢された牛）、酪農製品、豚
③労働組織
　家畜の生産と管理の会計簿、労働者の賃金、労働者の個々の名前、奴隷
④穀物と穀物製品
　穀物の配分、穀物の計算
⑤畑
　畑の収穫量[22]

書記は、こうした経済活動についての職務（税の徴収、労働者の指揮監督、穀倉の管理、等）と同時に、書記は、王の活動の記録、国の出来事の記録、王の秘書としての通信の管理、儀式の準備・執行、王への賛

歌の作成、公文書の整理・保管といった仕事があった[23]。

（６）公文書室と私的文庫

ネメット-ネヤット（Karen Nemet-Nejat）によれば、メソポタミアで発掘された多くの粘土板の部屋は、宮殿の入り口近くや、王の謁見の間にあった。すべての時代を通して、経済的行政的文学的テクストが大多数だった。粘土板は内容のタグをつけ、ひもで結ばれて、棚や長椅子、つぼ、カメ、等に保存されていた。書記は、通常、自分で書いたもの、生徒が書いたものを集めた私的文庫を持っていた。書記と書記学校は、神殿と宮廷の経済力のおかげで、粘土板を集めて、学問的研究を行うことができた[24]。

書記学校の生徒の中には、将来の書記としての仕事に生かすために、練習した粘土板を自分の家に保存するものもいた[25]。

エドゥバの意義

クレーマー（1963）は、文明の歴史から見て、シュメールの最大の業績は、楔形文字体系と公的教育制度をつくったことである、書くことは、シュメールから始まった[26]、と述べている。

チャイルド（Gordon Childe）は、「文字の発明は、要するに一定の記号に意味を付し、それを共通目的のために使うよう、社会の各員が合意に達することにほかならない。」[27] と述べている。文字に関しては、その通りであるが、このことは話し言葉においても同じではないだろうか。

また、教育という概念のとらえ方にもよるが、教育の歴史が文字の発明と同時に始まったと言ってしまうと、それ以前は教育がなかったことになる。文字が発明される以前の話し言葉によって社会生活が営まれている社会においても、言葉を使っている限りは、教育はあったのではないだろうか。

文字が発明される以前のメソポタミアの社会における教育について、教育史の記述は少ない。例えば、バウエン（James Bowen）の『西洋教育史―古代世界』（1971年）は、文字の発明以前の社会において話し言葉が使われていたことは述べているが、どのように教育が行われていたかについては触れていない[28]。現代の狩猟採集社会における教えることについては、ボイェッツ（Adam H. Boyette）らは、観察をもとに、次のように述べている。

①狩猟採集社会においても、教えることは存在する。
②広範囲の技能、知識、高度に価値づけられた文化的規範と価値について教えている。
③教える方法は、指し示す、やって見せる、言葉による説明と物語、、否定的強化と肯定的強化、仕事の割り当て、機会を与えて足場架けをする、子どもの身体を動かす、命令する、等、である。
④教えることの頻度は、幼児が１時間に10回ぐらいで多い。他の子どもたちと遊ぶ子ども期になると、１日に２～３回ぐらい、青少年期になると、道具を使う、儀式的宗教的知識、狩猟の技能と知識、特別な治癒の知識、と教えることが増える。
⑤教えることは存在するが、観察、模倣、大人の活動への参加といった社会的学習の方がより一般的である。
⑥教える人は、大人と年長の子どもであるが、行為や学習する子どもが参加する活動のレベルで、簡潔に、微妙に、間接的に教えている。自律性と平等性という文化的枠組みが影響を与えている。
⑦直接的な言語的教授は比較的に少ないが、狩猟、採集、手工、舞踊、生態学的知識について行われている。
⑧規範や価値観についての学習については、否定的なフィードバックや冷やかしが使われている。
⑨子どもたちは、２歳のころから、大人と対等に、教え始める[29]。

ボイェッツのこの記述は、話し言葉だけの狩猟採集社会においても、教えることは存在していたことを示している。

では、文字の発明による教育の変化をどのようにとらえたらよいのであろうか。

文字は、トークン、絵文字から発展したことからう

かがえるように、記憶を文字に置き換えたものである。ホスキンは、グディ（Jack Goody）らの著述を参照しながら、書くことは、その当初から、情報の貯蓄、コミュニケーション、思考の秩序づけ、という三つの目的のための技術として機能した、と述べている[30]。

文字を書くことによって、記憶を客観化し、客観化することによって、分類したり、比較したり、一般化したりして、その結果を書いて保存したり、それを人に伝達することができる。この文字の読み書きの技術を教える教授方法は、構造化されたカリキュラムを必要とすることを古代メソポタミアの学校のカリキュラムは教えている。フリーセン　（Norm Friesen）は、ホスキンの論文に触発されて、「書くことの歴史としての教育の歴史」という論文を書き、粘土板に楔形文字を書くということは、紙に鉛筆で字を書くこと、キーボードでパソコンに字を書くことと、記号を使った文化的技術という点では同じであることを指摘している[31]。このことは、ICTを使う今日の学校と学校の教授方法は、古代メソポタミアの楔形文字を教えるエドゥバの延長線上にあることを教えている。

引用文献

（1）Hoskin, Keith, Technolize of Learning and Alphabet Culture: The History of Education as the History of Writing, in Bill Green ed., The Insistence of the Letter- Literacy Studies and Curriculum Theorizing, The Falmer Press, 1993, pp.27-45.

（2）Halliday, M.A.K., Aspects of Language and Learning, Springer, 2016, pp.1-16.

（3）Robson, Eleanor, The Production and Dissemination of Scholarly Knowledge, in Karen Radner and Eleanor Robson ed., The Oxford Handbook of Cuneiform Culture, Oxford University Press, 2011, p.562.

（4）小林登志子『シュメル―人類最古の文明』中央公論新社、2005年、pp.204-220.

（5）桑原俊一「古代社会の教育：古代メソポタミアの資料を中心にして」北海学園大学『年報新人文学』5、2008年、pp.32-89.

（6）Schmandt-Besserat, Denise, How Writing Came About, University of Texas Press, 1992, pp.123-125.

（7）Kramer, Samuel N., History Begins at Sumer, Thames and Hudson Press, 1958（c1956）, pp.3-9.

（8）Kramer, Samuel N., The Sumerians- Their History, Culture and Character, The University of Chicago Press, 1963, pp.229-248. 学校（e_2-dub-ba-a）をクレーマーは、edubbaと表記している。1990年代半ば以降の研究論文では、edubaと表記したものが多い。

（9）Veldhuis, Neak, Elementary Education at Nippur, The List of Trees and Wooden Objects, downloaded from the University of Croningen/UMCG research database, diss., 1997, pp.11-12.

(10) Ibid, pp.18-23.

(11) Tinney, Steve, Tablets of Schools and Scholars- A Portait of the Old Babylonian Corpus, in Karen Radner and Eleanor Robson ed., The Oxford Handbook of Cuneiform Culture, Oxford University Press, 2011, pp.610-611.

(12) Veldhuis, Neak, The Cuneiform Tablet as an Educational Texts, Dutch Studies, Vol.2, No.1, 1996, pp.13-14.

(13) Griffith, Mark, Origins and Relations to the Near East, in W. Martin Bloomer ed., A Companion to Ancient Education, Wiley Blackwell, 2015, p.10.

(14) Sjoeberg, A.W., The Old Babylonian EDUBA, Lieberman, S. J. ed., Sumerological Studies in Honor of Thorkild Jacobson, Assyriological Studies , No.20, The University of Chicago Press, 1975, p.176.

(15) Veldhuis, Neak, Elementary Education at Nippur, The List of Trees and Wooden Objects, op. cited, pp.40-83.

(16) Griffith, Mark, Origins and Relations to the Near East, op. cited, p.10.
(17) Sjoeberg, A.W. The Old Babylonian EDUBA, op. cited, pp.168-170.
(18) Nemet-Nejat, Karen, Dailey Life in Ancient Mesopotamia,Greenwood Press, 1998, pp.57-58.
(19) Griffith, Mark, Origins and Relations to the Near East, op. cited, p.9.
(20) Veldhuis, Neak, Elementary Education at Nippur, The List of Trees and Wooden Objects, op. cited, pp.28-39.
(21) Nemet-Nejat, Karen, Dailey Life in Ancient Mesopotamia, op. cited, p.59.
(22) Bauer, Josef, Robert K.England and Manfred Krebernick, Mesopotamian-Spaeturuk-Zeit und Fruedynastische Zeit, Universitaetsverlag Freiburg Schweiz, 1998, pp.128-213.
(23) Pearce, Laurie E., The Scribes and Scholars of Ancient Mesopotamia, in Jack M. Sasson et al ed., Civilization of the Ancient Near East, Charles Scribner's Sons, 1995, pp.2272-2274.
(24) Nemet-Nejat, Karen, Dailey Life in Ancient Mesopotamia, op. cited, pp.62-64.
(25) Veenhof, Klaas R., Cuneiform Archives-An Introduction, in Klaas R. Veenhof ed., Cuneiform Archives and Libraries, Paper Read at the 30E Renconstre Assyriologique Internationale Leiden, 4-8 July 1983, NEDERLANDS HISTORISCH-ARCHAEOLOGISCH JNSTITUUT, 1986, p.5.
(26) Kramer, Sumerian, op. cited, p.229.
(27) チャイルド、G.著、今来陸郎・武藤潔訳『歴史のあけぼの』岩波書店　1958年 p.115.
(28) Bowen, James, A History of Western Education- The Ancient World, St. Martin's Press, 1971, p.2.
(29) Boyette, Adam H. and Barry Hewlett, Teaching in Hunter-Gatherer, The Review of Philosophy and Psychology, Vol.4, No.3, September, 2013 (Online 06 July, 2017), pp.20-21.
(30) Hoskin, Keith op.cited, p.34.
グディ、J. 著、吉田禎吾訳『未開と文明』岩波書店、1986. Goody, J. and I. Watt, The Consequences of Literacy, Comparative Studies in Society and History, vol.5, 1963, pp.304-345.
(31) Friesen, Norm, The History of Education as the History of Writing, in P. Siljander et al. eds., Schools in Transition, Sense, 2017, p.286.